

2011年西大寺コンベンション 講演 (午後)

テーマ：開拓と自立——『長屋の教会（20人礼拝）から取り組んできたこと』

赤江 弘之

「会堂建設から中規模教会達成まで（60人礼拝～200人礼拝）1979～2000」

1. 教会アイデンティティーの確立

「いつ聖霊を受けるのか」発行にともなう教団離脱。教会憲法の制定。しかしその一方、過去の歴史と関係者を大切にした。離脱後も、献堂式・記念礼拝などにお世話になった牧師たちを講師にお招きした。JEAに教会加入した。

2. 新しい弟子訓練プログラムの開始

第一回奉仕者研修会、第一回西大寺コンベンションを始め、単立教会としての新しい講師たちを、福音派諸教団から招くことが出来た。その他、新たな講演会を企画して新会堂を有効利用すると共に、多彩な教育・伝道プログラムが実施できるようになった。こうして、教会のスタイルが人間関係中心から、プログラム中心へと移行していった。

3. 新しい伝道システムの導入

個人伝道テキスト「永遠への道」を出版して、すでに切り替えていた特伝方式に変えて、信徒による教育的個人伝道方式を推進した。また、新来会者受け入れシステムも取り入れて、礼拝人数の増加に備えた。そのほか、新会堂を活用する映画会、コンサートなどの音楽プログラムや、イースターフェスティバル、夕涼み会、教会運動会などのイベントが始まった。教会の信徒と家族、友人たちが集いやすいお祭り伝道である。このころは礼拝人数が80人規模であった。

4. 教育伝道プロジェクトの始まりと、施設の充実

サムエル一日幼稚園や、ボーイスカウト西大寺第五団は1983年に取っかかり、今日では共に20周年を超えて発展している。このころ礼拝が100人を超え始めた。教会は1984年に牧師館を敷地内に建設し、同時にベテルの塔を建て、「揺りかごから墓場」の形が整った。前後するが、対外的には1981年に第一回西日本青年宣教大会を始め、教会協力による青年伝道が岡山を中心に西日本で行われるようになった。この働きは、1990年から数百人が集う賛美集会VICTORYへと進展し、今日に至っている。

5. 教会成長研修所への招き

1984年～1985年にわたり、日本教会成長研修所の学びに参加する機会を与えられた。この研修会に私を送り出した教会は大きな転換期を迎えることになる。教会成長方策論文「私たちの教会——過去から現在」「瀬戸内ベルトライン計画」が、その成果であった。大規模教会を目指しつつ、並行して子教会を多く生み出すという、教会開拓方式をとり入れたのである。これは、見かけの教会成長の反することであったが、神の御心の優先性を信じて歩み出した。このとき、ラルフ・カックス宣教師との出会いがあり、1984年から円山伝道所を皮切りに11カ所の開拓伝道が生み出された。それは、すさまじいばかりの主の御業であった。

6. 宣教の広がり

開拓伝道の開始という宣教のビジョンの広がりに踏み出したとき、神さまはさらに大きな宣教の拡大プロジェクトを備えておられた。一つがラジオ伝道「希望のこえ」であり、もう一つの始まりが日本国際飢餓対策機構との出会いであった。ラジオ伝道は26年目を数えており、食料デー岡山大会は20回が目前にある。

ラジオ伝道は西大寺教会単独の働きであるが、見返りを求めない宣教の広がりを持つ宣教の概念に支えられている。また、国際飢餓の働きは、1974年のローザンヌ誓約に謳われた福音派の教会による社会的責任を果たす意味をもっている。

7. 新しいスタッフの登用

1986年、礼拝平均134人のとき、若い教職を同盟教団に加入前であるにも関わらず、新卒の時松六博先生を派遣していただいた。翌年副業を持っていた田中幸夫先生を無任所教師に迎え、短期宣教師や、信徒の英会話教室の有給スタッフを採用した。この後、信徒の有給事務職員を迎えるなど、かなり大胆で、柔軟な積極人事が行われた。ビジョンのあるところ、主が次々と人材を送り込まれていたように思える。こうして、東岡山・南岡山伝道所が相次いで始まった。

8. 組織の見直しと記念誌の発行

礼拝人数が150人に近づく頃、教会設立25年記念誌「恩寵」（創立58年）を発行し、長年取り組んできた長老執事制導入の準備が始まった。私は、インドネシア宣教地視察旅行に行き、聖地旅行で見聞を広めた。また、教会のメンバー14人で、ハワイの教会と合同研修会を現地で行った。過去を見据え、将来を展望する主の導きによる企画であった。1987年～1989年にかけてのこと。

9. 大変動のとき

1990年～1991年。サムエル幼稚園を開設し、同盟教団に加入し、岩藤啓代姉をポルトガル宣教に派遣し、ログハウス建設を成し遂げた。さらに朝岡勝先生を迎えた年、「教会政治規程」を制定して、長老執事制が始まった。このころ、第三礼拝として、夕礼拝が始まった。私は高知開拓に一年間、毎月のように通った。当時の朝倉喜び教会の始まりで有り、現在の高知喜び教会の端緒となった。

10. 教勢の停滞期

礼拝150人が数年間続いたことは、予想外であった。1998年から1992年にかけてのことである。その理由は定かではないが、上記のように、次なる飛躍の時期であったかもしれない。しかし、幼稚園開設、長老執事制の準備の中で、教会観・宣教理念の違い、感情的問題などもあって、1992年にかなりの重要メンバーがそろって転出したことが響いていると思われる。断定できないが、この年始まった教育館建設が、微妙に影響していたかもしれない。

11. 教育館の建設

1993年、礼拝人数は不思議に再び増えはじめたのである。これ以降2000年に200人礼拝になるまで毎年増加している。教会は一致して教育館建設に取り組み、献堂記念特別伝道集会にお招きした本田弘慈先生は、教団離脱以来19年ぶりに来てくださり、離脱後の歩みを大いに喜んでくださった。主による大いなる和解の恵みであった。教育館建設効果は、サムエル幼稚園の発展につながり、この年始まった「聖書を学ぶ会」などを通して多くのお母さんたちが救われたことは明白な事実である。

12. スタッフの増員・働きの充実

同年4月、教会主事として五十嵐賢志音楽主事、竹本喜代子事務主事を迎え、2年後には、河本繁巳伝道師、その翌年1996年には中尾芳也先生が、独立する東岡山に着任し、播磨伝道所に荒井隆則先生を迎えた。1997年、朝岡勝先生に代わり、西村敬憲先生が就任して今日に至っている。1995年、教育館建設の2年後から、午前9時からの第二礼拝が始まり、現在の礼拝四部制となった。礼拝人数増加の有力な要因の一つである。

13. 教団公務の影響

私は1992年に伝道部員になり、1994年に伝道部長に任命された。そして1996年いきなり教団副理事長に選ばれ、2000年から教団理事長職を拝命し、2006年に教団公務定年で理事職を退くまでの長きにわたって、教会から派遣されてその務めを果たした。西大寺教会にとって、この影響は推しはかりがたいものがある。メリット、デメリットは人間の推測を越えている。西大寺の信徒が、教団という主の大きな教会の一つの群れにお仕えしたと言うほかに言いようがない。しかし、単立教会であった方がよいと言うことは、断じて言えない。いまも、東京キリスト教学園の務めが今も続いている。あと少し……………。

14. 中規模教会から大規模教会に向かって

2000年、教会創立70周年に新長期計画を打ち出して、今年は12年目である。2011年は創立81年目である。今、新たなステージを迎えている。サムエルキリスト教学園(SICA)は10年目となり、ケアサービスあい愛は11年目を迎えた。次は、大規模教会の礼拝401人を目指して歩みたい。

マッキントッシュの教会の規模による分類表

項目	小規模教会	中規模教会	大規模教会
礼拝出席者数	15~200人	201~400人	401人以上
志向性	人間関係	プログラム	組織
構造	単一細胞	伸縮細胞	多細胞
リーダーシップ	鍵を握る家族	委員会	選ばれたリーダーたち
牧師	愛の人	管理運営者	リーダー
決断の主体	会衆	委員会	スタッフとリーダー
決断の要因	過去に倣う	変化するニーズ に対処する	ビジョンに 合わせる
スタッフ	副業を持つ牧師 もしくは牧師1名	牧師と少数の スタッフ	多数のスタッフ
変化	鍵を握る人 を通して	鍵を握る委員会 を通して	鍵を握るリーダー を通して
成長パターン	下から上へ (ボトムアップ)	内から外へ (ミドルアウト)	上から下へ (トップダウン)
	人間関係 魅力型	鍵となるミニストリー プログラム型	口コミ 宣教型
成長障害物	小教会イメージ	不適切な設備	新来会者を定着 させられない
	効率の悪い伝道	不適切なスタッフ	組織の官僚化
	不適切なプログラム	不適切な財政	コミュニケーション の機会に乏しい
	下方への重力	貧しい管理	ビジョンの喪失
	内向きの交わり	増加する複雑さ	会員を配慮できない
成長戦略	目的意識 の明確化	教会アイデンティ ティーの確立	ビジョンを 刷新する
	新しいミニストリー を始める	新しいスタッフ の登用	新来会者の受け皿 を考案する
	伝道の機運 をあげる	施設の使用頻度 を増やす	手続きの流れ を整える
	良いことを 評価する	礼拝回数を 増やす	必要に合うイベントを 企画する
	新しいグループ を始める	長期計画 を立てる	リーダーシップの役割 を変換する
	新しい人を 登用する	ミニストリーの 質を向上させる	小グループを 増やす